

よつねつと

二次予選出場者 30名決定

審査員の方々の慎重な審議の結果、当初33名選出の予定が30名の方が選出されました。

4	5	7	8	14
22	26	33	35	38
39	40	41	44	47
48	49	50	53	54
60	66	67	71	72
73	77	87	88	91

【二次予選 課題曲】

下記の(a)(b)どちらかを選び演奏すること。いずれの場合も繰り返しなし。

- (a) J.S.バッハ:パルティータイ短調 BWV1013
(b) C.P.E.バッハ:ソナタイ短調



村松楽器販売(株)の草川さんへのインタビュー Q このコンサートの印象は?

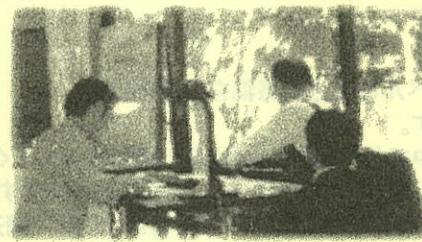
○ 演奏者の皆さんはとても緊張されていますが、スタッフやボランティアの皆さんのが温かく、ちょっとしたことにも親切に対応していただけるので、緊張がほぐれている様子です。

○ 田舎のおじいちゃん、おばあちゃんのところに帰ってきたような温かい雰囲気が伝わります。

○ 演奏者同士も落ちついて演奏に集中でき、練習も個人でできる場所や時間もあり、送迎もしていただけて、他にはない環境の整ったコンクールです。演奏者の皆さんは万全で臨まれていますが、あともう少しのところで楽器の調整にかかるわせていただけるのが嬉しいことです。

○ フルートは響かせる装置が備わっていないので、押さえるキーの間のすき間が、1ミリの何十分の一の違いでいい音が出なくなります。とても繊細な楽器なのです。演奏後、こうしてメンテナンスさせていただく次の演奏に安心だと思います。

—村松楽器の草川さんは、演奏者に安心を与えてくださいます。いつもありがとうございます。メンテナンスを受けた方は、気持ちよく演奏できたと大変喜んでおられました。



メンテナンスされる草川さん

~加東市ふるさと納税(ふるさと応援活動支援金)のご協力をお願いいたします~

特定の団体(支援希望団体)に対する寄付の受付を開始しています。

QRコードをスマート等で読み取っていただくと加東市ふるさと応援活動支援交付金制度のページにつながります。申請用紙については、ホームページからダウンロードできます。

特定の団体(支援希望団体)については、「特定非営利活動法人 新しい風かとう」にお願いします。

詳しくはホームページをご覧ください。

また、団体名をクリックしますと「特定非営利活動法人 新しい風かとう」のホームページをご覧いただけます。



加東市東条文化会館
コスミックホール



ホームページ
<http://cosmic-hall.org/>



1次予選講評 萩原貴子審査員

全国各地から、このコンクールに集まってきた若い人達を見て、自分自身の若い頃を思い出しました。ステージというのは、いつも何が起こるかわからない、綱わたりの様なもの。一瞬の時間と空間に描く音の世界ですね。音の形をデザインし、音の波動がどの様に伝わってほしいのか考えるのは、すごく楽しい作業だといつも私は思います。

1次では、20世紀以降のフルートソロが課題でしたね。

・色彩感を求めるもの・力強さが必要なもの・題がついていて表現するものが具体的にあるものいろいろでしたね。練習中3件先から苦情が来た人もいたでしょう。ペットが驚き走り回り逃げた家もあつたかな?

フルートを吹くということは、技術的には物理的な現象を理解する必要があるし、音楽を表現するということは、音楽の歴史を知り、様式感をふまえた上で、人間の不偏的な心の深い所に響くものをいつも追求するということだと思います。おもしろい表現も聞くことができました。レヴェルの高さを感じました。1次受かった人は、2次、3次の用意だし、落ちた人も決して残念ではなく、これまで努力して身につけたものこそコンクールの成果です。これからも道は続きます。受かった人に一つアドバイス。2次・3次・本選と疲れがたまるでしょう。私は20才の頃、神戸のコンベンションコンクールで、本選までやっとたどりつき、ここはちょっとドーピングと思いドリンク剤を飲んだのでした。その結果、自分ではそんなつもりはなかったが大汗・大爆音・猛スピードを金先生に注意されました。

出場者&ボランティアの声

【演奏者】

○ 有馬から来ました。近くでのコンクールなので、今年で2回目です。いいホールなので、よく響いて演奏していて気持ちいいです。

○ 沖縄から来たんですけど、ホールがとてもよく響くので驚きました。いいホールですね。
—演奏に向かわれる顔と演奏を終えて帰ってこられた時の顔の違いに、私たちもホットします。

—(ボランティアスタッフの声)

【受付係】

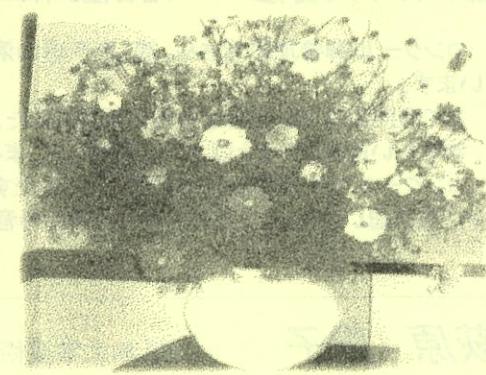
○ 受付係というのは、いろいろなことでの質問があるので、コンクール全体の流れとその流れにかかる備え等々について周知しておかねばなりません。とにかく、落ちついて、ていねいに、わかりやすく説明すること、笑顔を忘れないように対応することを心がけています。

○ 何気ない会話の中に、ちょっとしたウイットをきかせた声かけを心がけています。

まずは、緊張をほぐすことを考えながら接しています。

【接待係】

○ 審査員の先生方のお疲れを思い、時間を常に気にしながら、おいしいお茶を提供できるように考えながら仕事をさせていただいている。



~日本木管コンクール開催における協賛金・ご寄附にご協力ををお願いいたします~

日本木管コンクールは、地元の企業や楽器メーカー各位をはじめ、コンクールを応援してくださる個人の皆様の温かいご寄附とご協賛に支えられて取り組んでまいりました。

「この素晴らしいコンクールと文化の灯を消してはならない」との思いと、若手音楽家の登竜門として、また日本の音楽文化の発展に寄与した功績をご理解いただき、今後もコンクールを継続するためにもご協力を仰ぎたいと考えております。

どうぞ、今後とも、皆様の温かいご支援を宜しくお願いいたします。

詳しくは「特定非営利活動法人 新しい風かとう」又はQRコードをスマート等で読み取ってご覧ください。



審査員の先生による 一次予選 講評

高木 純子 (東京藝術大学准教授、洗足学園大学客員教授)◎審査委員長

20世紀の無伴奏の作品、という課題の1次予選でしたが、5分という制限がある為か、馴染みの曲が多かった様に感じました。この現代の作品は「何を大切にするか」を見つける事が大きな差になる様に感じました。音色の変化を求められている、感情的叙情的な表現を求められている、リズムの正確さ、おもしろさを求められている。もちろん、それぞれ考える事は異なって当然ですが、ただ、音やアーティキュレーションの並んだ世界にならず、息のスピードによる音色の違いや、ホールの響きによる間の取り方などなど、1つの曲の中でも多様な世界を魅せられる事が、聴き手の耳を楽しませる演奏になるのではないでしょうか。

今回、とてもレベルの高い演奏が多く、充実した2日間で、これから2次、3次と期待しております。

竹林 秀憲 (一般社団法人日本フルート協会常任理事/元相愛大学音楽学部教授)

一昨年に続きフルート部門の審査をさせていただいています。本日、初日から若者達のすばらしい演奏を聞くことができました。前回に勝るとも劣らない高いレベルなので、審査にも力が入ります。コンクールは受験者の真剣勝負の場です。演奏会とは違った緊張感が会場に満ちています。皆様、コスミックホールの客席からこの雰囲気を経験してみませんか。そして、舞台上的な演奏者を応援してやってください。100パーセント以上の力を発揮してくれること間違いないです。



白尾 彰 (桐朋学園大学音楽学部名誉教授/元新日本フィルハーモニー交響楽団首席フルート奏者)

日本木管コンクールは国内の他の一流のコンクールと同様大変高い水準にあり、過去の入賞者達はその後もいろいろなところで活躍しています。今年も大変立派な演奏を聞くことができて嬉しいです。楽器をコントールして難曲を演奏するというのはとても難かしいのですが、多くの人達がそれをクリアーしていたと思います。その人達に更に何を望むか?といえば、もっと作曲家の意図しているものに近づこうとする気持ちではないでしょうか。たとえばフルーティストにとってプレスは大切ですが、音楽そのものにとってフレーズを決定するものであり、プレスの場所はとても重要です。そうしたことへの配慮がもっと必要であるとも感じました。皆さんの更なる進歩を願っております。

中川 佳子 (京都市交響楽団副首席フルート奏者)

平成2年に始まった第1回から今年は平成最後のコンクールになったわけで感慨深いです。初日の早い時間からハイレベルな演奏が続き、沢山の人数を聴く初日もあっという間に終了しました。テクニックは飛躍的に全体的におそらく向上していると思います!ここから本選まで残っていく人達というのは曲の世界観をどこまで表現しているか、だと思います。ものすごく素敵な音楽を聴かせてくれた人が何人もいたので、この後も楽しみです。また今回惜しくも残れなかつた方も自分自身の言葉を使った演奏をどこかで聴かせていただくを楽しみにしています!

中野 真理 (東京音楽大学准教授)

一次予選は、楽に演奏できる曲は皆無でしたが、殆どの人が難曲を普通にこなしていたというレベルの高さに感銘を受けました。しかし音符を正しく並べることに満足せず今一度、基礎奏法にしっかりと目を向けてほしいと感じます。例えば緊張感の必要な長い持続音がぶれないこと、それとは対称的にリズミカルな速い動きの中でも(休符を含め)息の流れを真っすぐ保つこと、クラシックとは違い、もっと細かくダイナミクスの差を付ける必要があるが、音程が破綻しない...等々一朝一夕では出来ない事柄です。「息」は目に見えないですが、より良い演奏をするためには、自分の出している息のスピードや、拍感を明確にイメージできるように日々精進いたしましょう!

富久田 治彦 (名古屋フィルハーモニー交響楽団首席フルート奏者)

コンクール御参加の皆さん、第1次予選の演奏ありがとうございました。私はコンクールでいつも様々な感性に出会えることをとても楽しみにしています。さて今回の第1次予選は自由選択曲でした。とてもレベル高い演奏を聞くことができました。吹きたい曲をここぞばかりに演奏して、まるで自身の作品のよう、自分の歌のように奏でている姿が見られました。大変素晴らしいです。コンクールですので結果は悲喜こもごもですが、一音一音を大切に練習にかけた時間、そしてコスミックホールで演奏したことを忘れないでください。良い思い出として、皆さんのこれからの音楽人生の糧となることを望んでいます。

萩原 貴子 (日本大学芸術学部教授/洗足学園音楽大学客員教授/東京藝術大学音楽学部非常勤講師)

全国各地から日本木管コンクールに東条コスミックホールで若いフルーティストの演奏を聞き、自身の若かりし頃の事が鮮明に思い出されました。「音の中にどんな世界を描き込むか、その音を聞いた人がどんな感情体験をするのか?」時間と空間に音をデザインするのです。審査をしていると、技術的な事も聞こえますが、一番大切なのはこの部分だと感じます。一次審査は20世紀以降のフルートソロ曲が課題。
・色彩感を求められるもの・力強さが必要なもの・曲に題がついていて、表現するものが具体的にあるもの、様々でした。工夫のある表現も沢山聴くことができ、レベルの高さを感じる一次審査でした。フルートを吹く上で技術的なことは、物理的に理解する必要があるし、音楽を表現するということは、音楽の歴史を知り、様式感をふまえた上で、人間の普遍的な心の深い所に響くものを追求することだと思います。試行錯誤を経て音楽を作る過程で得たものこそ、コンクールを受けたことによる真の成果。参加者全員のパフォーマンスに拍手を送ります!

